

第7節 博士課程教育リーディングプログラム・ 卓越大学院プログラム

第1項 博士課程教育リーディングプログラム

(1) 「免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム」

a. 概要

千葉大学が有する100年以上にわたる臨床医学の確固たる実績とともに、癌や免疫に関連する疾患の領域で最先端の治療研究に携わる若手研究者を育ててきた実績と強みを生かし、難治性の免疫関連疾患に特化した「治療学」の推進リーダーを養成するプログラムを大学院医学薬学府博士課程に組織し、領域横断教育と産官学連携によりグローバル社会で活躍する実践的なリーダーを育成することを目的とする。2012年に文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムに採択され、2013年4月からプログラム教育と学生支援等を開始した。2018年度にて政府支援が終了した後も、プログラムを継続している。

プログラム生は、学内に留まらず理化学研究所（理研）や量子科学技術研究機構（量研）とも連携した領域横断教育に加え、ローテーション演習や海外実習等で学修する。プログラム修了者は、免疫関連疾患の病因や治療法、新規の治療技術等を深く理解しトランスレーショナルリサーチや臨床研究を統括指導する能力とともに、リーダーとして必要な人間力を育み、将来、国内外の大学や研究所のみならず、製薬企業等で新しい治療薬や治療法の開発を推進するリーダー、大学病院などの基幹病院で先端医療の開発・実践を統率する責任者や医療行政機関の指導者として活躍できる人材の養成を目指す。

本プログラムは、2018年度的事後評価でA評価を受けた。2023年3月までに修了生60名を輩出しており、修了生の30%以上が海外で職を得るなど国内外で活躍している。

b. 実施体制（2023年3月時点）

全体責任者を中山俊憲学長（採択時は齋藤康学長）、プログラム責任者を斎藤哲一郎教授（採択時は徳久剛史理事）、プログラムコーディネーターを本橋新一郎教授（採

扱時は中山俊憲教授)が務め、国内外の産官学に所属するプログラム担当者42名が参画している。本プログラムには学内の教授22名と准教授2名(医学研究院13名、薬学研究院3名、看護学研究科2名、理学研究科3名、真菌医学研究センター2名、社会科学研究院1名)に加え、企業の6名、理研3名、量研1名、かずさDNA研究所1名、海外研究機関7名の客員教授、計42名がプログラム担当者として参画している。加えて、ハーバード大学等の19海外研究機関の34名の客員教員からなる独自のグローバル教育体制Chiba Innovative Therapeutics International Programと、国内外企業23社や4政府関連機関の34名の客員教員で組織される産官学横断教育体制Chiba Innovative Therapeutics Industry Consortiumも教育と学生支援を担当している。

c. 学生の選抜と教育、支援

先端医学薬学専攻へ入学する108名/年(定員)の入学予定者及び在学学生の中から、本プログラムのOpenなシステムの下、英語力や英語での研究プレゼン力、生命科学の理解力、グローバルリーダーの素養を総合的に評価し、特に優秀な10名程度を選抜している。

教育内容として、治療学を体系的に推進する能力を育む「治療学演習」では、プログラム学生は全18ユニットから5ユニット以上をローテーションで学修し、基礎研究から臨床応用までの幅広い俯瞰力を養っている。また、国内外企業や世界保健機関(WHO)等の国際機関での「治療学実習(インターンシップ)」を通し実践力を培っている。「臨床腫瘍学特論」や「臨床アレルギー学特論」、また国内製薬会社の研究所長をはじめとする学外教員が講義する「創薬キャリアパス特論」等で高い専門性を養うとともに、俯瞰力や多角的視点を養う「高い教養を涵養する特論」では、企画と講演者との交渉等をプログラムの学生自身が行い、ノーベル賞やラスカー賞の受賞者に加え人文系の一流の講師を招聘し、リーダー論も学修している。また、学生主導でウインターキャンプや治療学実習の企画等を行い、学生の主体性を高めている。

プログラム生は、20万円/月を上限とする奨励金もしくはエフォートに応じたリサーチアシスタントなどの支援を受けるとともに、提出した研究計画書の審査結果に基づき30万円/年を上限とした特別研究費を受けることができる。

進級試験と世界標準の学位審査で質を保証する仕組みとしている。

①進級条件

進級試験では、以下の要件を満たした者のみに3年次への進級を許可する。

- 1) 英語力AA評価(TOEIC 750点相当)以上

- 2) 英語での研究プレゼン力AA評価（自身の研究の目的や計画、成果の説明、試験委員との質疑応答を英語で行うことができる）
- 3) 仮想ビジネスプラン発表会でのリーダーシップ評価（小グループで仮想ビジネスプランを提案し、グループ内での意見集約や最終プラン提案までのリーダーシップを評価する）

②修了要件

修了要件は、先端医学薬学専攻の修了に加え、治療学コースの科目を16単位以上（領域横断科目13単位、治療学演習2単位、治療学実習1単位）を取得すること、英語力S評価（学位審査委員の外国人客員教員がグローバルリーダーとして通用する英語力と認めること、もしくはTOEIC 850点相当以上）、国際学会で研究内容を英語で発表すること、外国人客員教員を含む学位審査委員会において、博士論文の審査を全て英語で受けて最終試験に合格することである。学位記には、千葉大学の学位規程に従い「免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラムを修了したことを認める」と付記している。

(2) 「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」

－ 5 大学共同災害看護学専攻（5年一貫制博士課程）の設置－

2012年に、文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムに「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」が採択され、その運用母体として2014年に大学院看護学研究科に共同災害看護学専攻（5年一貫制博士課程）が新設された。博士課程教育リーディングプログラムは、世界が直面している環境、エネルギー問題など人類社会の持続可能性を脅かす深刻な課題に、専門分野の枠組を超えて全体を俯瞰し社会的課題の解決に導く高度な人材を養成することが不可欠との認識で始まった助成事業である。当時看護学分野の博士課程に実績を持つ大学の教員有志が集まり、この趣旨に沿う人材を看護学の分野から排出していくことの重要性を確認し、千葉大学、高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、日本赤十字看護大学の5大学で構成する共同教育課程として申請する意思を固めた。阪神淡路大震災、東日本大震災など繰り返す自然災害を通して培った看護学の知を結集し、世界に羽ばたく人材を育成していくことの期待が高かった。ただ、国公私立の5大学が共同して新たな教育課程を構築することは思いの外困難が多く、まさに“果敢なチャレンジ”という言葉にふさわしい取り組みであった。

a. 共同災害看護学専攻の教育課程

(「共同災害看護学専攻博士課程履修の手引き」より一部抜粋)

①教育理念

人間の安全保障を共通理念とし、参画する大学院がそれぞれ蓄積してきた資源を共有し、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、学際的・国際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する世界的リーダーを養成する。

②学位記の名称

5大学学長連名による博士(看護学)(学位記にはDisaster Nursing Global Leaderを付記)の授与

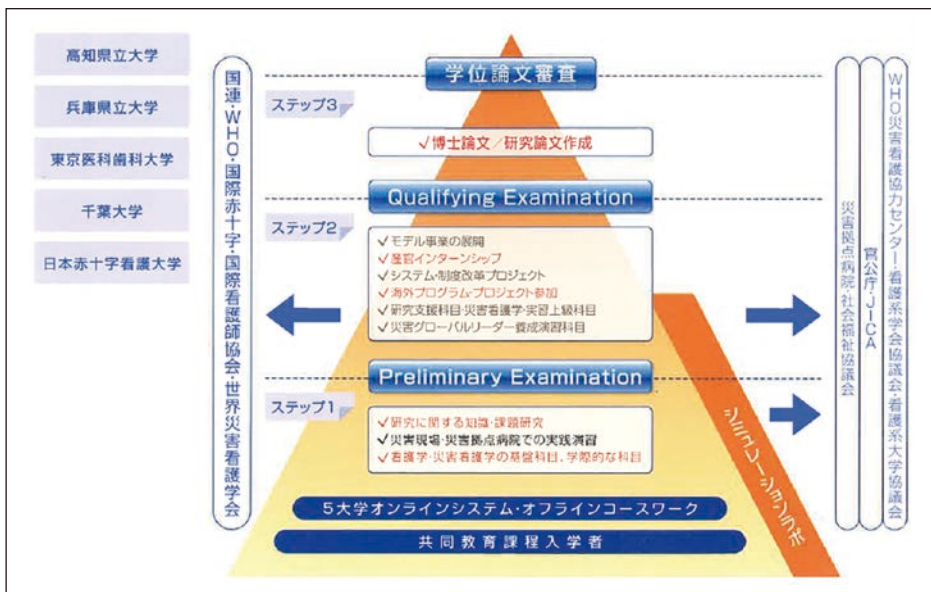
③共同教育課程の概念図

5年一貫制博士課程で、修了要件50単位、それぞれの構成大学において10単位以上を修得する。図1-2-7-1に示すように、Preliminary ExaminationとQualifying Examinationを経て、博士學位論文審査に至る。

b. 災害看護グローバルリーダー養成プログラム(DNGL)

博士課程教育リーディングプログラムは支援期間7年で、学生への奨励金や国内外

図1-2-7-1 共同教育課程の概念図



の機関でのインターンシップ等に必要な経費に活用することができた。そのため、学生は在学中にWHO本部での研修、国連ジュネーブ事務局への訪問や、フィンランドでの国際災害キャンプへの参加、国内で発生した自然災害の緊急援助への参加などを通して、高度な実践と課題解決能力を高めることができた。また、災害看護国際学術雑誌としてHealth Emergency and Disaster Nursing (HEDN) を創刊し、国際的なリサーチコミュニティの基盤を築いた。助成事業が終了した後は、共同災害看護学専攻を改変し、2021年から災害看護副専攻プログラムとして5大学の他専攻に受講者を拡大させた5大学災害看護コンソーシアム科目を整備している。

c. 災害看護グローバルリーダー養成プログラム (DNGL) の実績と発展的な継続

入学者を受け入れた2020年度までの間、入学者は合計52名（うち留学生6名；中国、インドネシア、ネパール）であり、2023年3月末において、修了者30名、退学／転部者3名、在籍者19名である。

修了者の就職先は、国際協力機関（独立行政法人国際協力機構（JICA）等）、国立研究機関（国立研究開発法人日本原子力研究開発機構等）、省庁（厚生労働省）、大学（京都大学、名古屋大学、Universitas Indonesia等）、医療機関（聖路加国際病院等）、地方自治体（保健所等）、民間企業（データコンサルティング関連）であり、国際的視野を持ちながら、国内外において、災害関連業務に従事している。

修了者同士及び修了者と在籍者の交流も活発であり、5大学では年1回、修了者の活動と未来をテーマとした修了後の活動報告並びに災害看護グローバルリーダーとしての展望を発表する場をもっている。このような場等を通して、修了者及び在籍者の交流とネットワーク形成がなされ、国内外の大規模災害発生時には、修了者及び在籍者が連携して現地支援を行うなどの活動につながっている。

また千葉大学ではDNGLの設置当初から、科目「災害と文化」の一環で、園芸学研究科の協力のもと看護学研究院敷地内にガーデンを開設し、植物を通じて地域文化を理解する学際的な技術演習の場として、DNGL及び他専攻の大学院生延べ約80名が継続的に活用している。

2021年度から開始した5大学災害看護コンソーシアムは、DNGLの後継プログラムとしてDNGLの発展的な継続を志向するものである。5大学がそれぞれの強みとする科目を合計12科目提供し共同運営している。2021年度は5大学の各看護学専攻等から延べ62名、2022年度は延べ71名が受講しており、各大学院の人材育成を災害看護グローバルリーダー養成の観点から強化・補完する取組が進行中である。